

[第13回日本言語文化学会発表要旨]

東京語アクセント聞き取り能力の縦断的調査結果分析
ーフォローアップ・インタビュー との関わりからー

中川 千恵子
(1996.12.7発表)

1. 目的

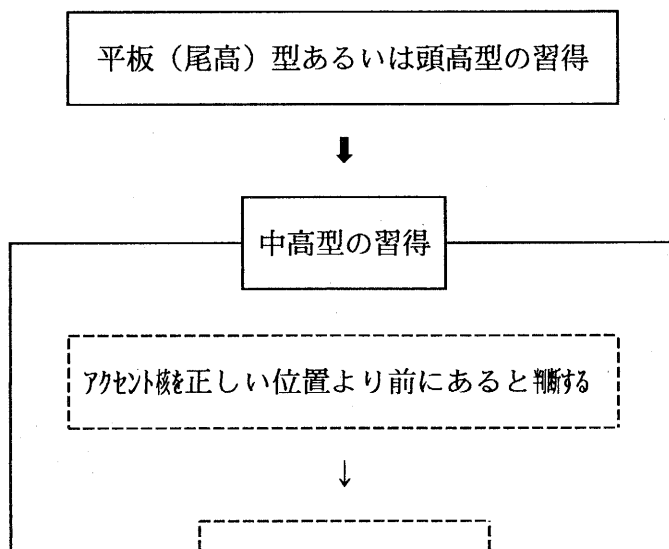
本研究では、95/96年お茶の水女子大日研生7名の1996年10月より8月まで6回実施した「東京語アクセントの聞き取りテスト」結果から、アクセント型の正答・誤答の変化について分析検討することを目的とする。

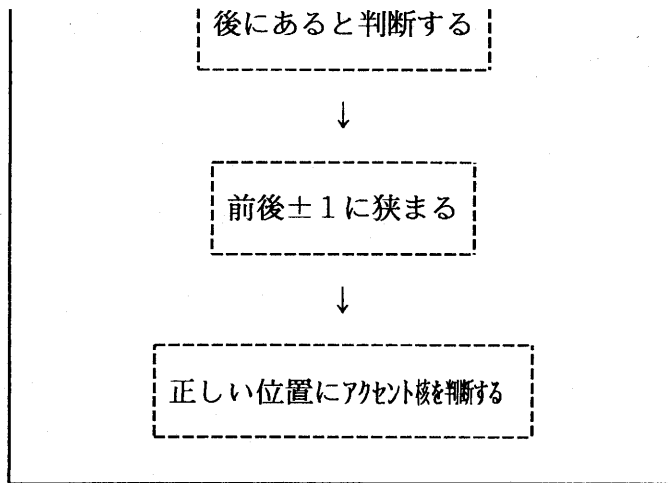
2. 研究の概要

2.1 方法

東京語のアクセント型別聞き取り能力の習得順序について仮説をたて、意識調査と追加テストの結果を参考にし、検討する。フォローアップ・インタビューによる被験者の意識についても重視して分析する。

[東京語アクセント聞き取り能力のアクセント型別習得順序仮説]





2.1 調査資料

- (1) 東京語アクセントの聞き取りテスト：テストは3種類あり、テスト1は単語単独発話、2は文中の切り取った語、3は文中の語について聞き取ったアクセント型を答えさせるもので、各テスト24の刺激語がある。3回目の2月のテスト終了後、録音テープを再生し正答を知らせた。
- (2) 意識調査：テスト3の刺激語24語とダミー6語についてアクセント型を答えさせる調査。1回目と6回目のテスト時に実施。
- (3) 追加テスト：6回目聞き取りテストのあとで実施。
- (4) フォローアップ・インタビュー：4回目と5回目の間（6月）に、被験者の意識と言語環境を知るため、ひとり約30分のフォローアップ・インタビューを行なった（ネウストブニー 1994）。

2.2 被験者

お茶の水女子大学の日本語・日本文化研修留学生で、1995年9月来日し、全員同じ学生寮に住み、他の留学生とともに日本語教育を受けた。欧米系5名は来日経験があるが、アジア系2名は今回が初来日である。

3. 結果

3.1 聞き取りテストと追加テストと意識調査の全体的結果

テスト1の成績はほぼ全員がのびている。しかし、テスト2と3は個人

差が大きい。追加テストも大体聞き取りテストの成績に対応する。意識調査についても大体テスト結果に合致する。

3.2 フォローアップ・インタビューの全体的結果

- (1) 欧米系の学生はアクセントやイントネーションがあることを知らなかった。日本語のアクセントは「はし」「あめ」ぐらいだと思っていた。
- (2) テスト時の意識として、全体にとくにどのテストがやさしいとか難しいの意識、とくになぜ成績が上昇をしたかの意識もない。
- (3) 初期に発音・アクセント・イントネーションの指導を受けていれば、という声とともに欧米系には負担が大きい、という意見もあった。
- (4) テレビ、とくにトレンドードラマを見る学生が多い。
- (5) モティベーションが大きく作用しているようである。

3.3 個人別分析（インタビュー資料は斜体部分）

ここでは、アクセント型を0（平板・尾高）型、1（頭高）型、語尾から数えたアクセント型で-2、-3、-4型というように呼ぶ。

§J.1(韓国)：4回目に正答率が3回目の2倍になった(90%以上)。習得順序は、大体「仮説」に準ずる。しかし、一度に成績が上昇しているのははっきりわからない。この被験者は自分の変化についての意識があった。

・1回目は慣れないで迷っていたが、2、3回目は聞き取れていた。3回目で答あわせをしてわかった。4回目はよく聞き取れたと思う。

§J.2(オーストラリア)：習得順序は、テスト1と2は大体「仮説」に準ずるが、テスト2では正しいアクセント型より前のほうに聞くことが多い。はじめから成績がよいが、-3型は最後まで誤答が多い。

・学習期間が10年近くで、1年間の日本滞在経験もあり、メルボルンは日本語にふれることの多い環境であるが、化石化しているようだ。

§J.3(イタリア・ベス)：習得順序は大体「仮説」どおり。成績は順調にのびた。

・通訳になりたい。日本語のアクセントやイントネーションがよいと有利だと考えている（モティベーションが高い）。

§J.4(ナリ)：最後まで正答率は50%前後で、誤答の型も分散している。

・聴解テープを買って聞いているのだが…

§J.5(韓国)：習得順序はテストによって異なる。テスト1では、後の

核に、テスト2と3では前の核に判断し、正答になるようである。-3型が不得意で、最後まで誤答が多いのは他の韓国語母語話者にも通じる。

・Sj.6の影響でアクセント型について調べるようになったが、将来は日本語と関係ない仕事につくだろう(ややモチベーションが低い?)。

Sj.6(中国・瀾)：はじめから誤答が少ない。

・日本語教師になることは決められている(モチベーションが高い)。

Sj.7(ポーランド)：際立った成績の上昇はないが、ゆっくりのびている。

・母語のアクセントについて反省してみて、アクセントに注目するようにしたと言っているが、ストレスで聞き取っているとも考えられる。

4. まとめと今後の課題

〔習得順序仮説〕がひとつの目安となっていることが認められたが、7名の被験者それぞれにさまざまなバリエーションがあること、また、段階も異なることがあきらかになった。今後他の被験者についても同様の仮説を用いることができるか検討していきたい。

本研究は文部省科学研究費補助金(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」(研究代表者：水谷修 課題番号 08NP0701)、一般研究(B)「外国人日本語学習者の韻律習得過程に関する縦断的研究」(課題番号 06451161)交付を受けて実施したものの一部である。

【主な参考文献】

ネウストプニー, J.V. (1994) 「日本研究の方法論—データ収集の段階—」

『待兼山論叢』 1-24.

鮎澤孝子・西沼行博・李明姫・荒井雅子・法貴則子(1995)「東京語アクセント聴取実験結果の分析—10言語グループの結果—」『国際社会における日本語についての総合的研究第2回研究報告会予稿集』 25-32.

平田悦朗・鮎澤孝子・中川千恵子・小高京子(1996)「東京語アクセント聞き取りテスト縦断的調査結果報告—韻律教育を実施した場合の観察報告—」第4回国立国語研究所国際シンポジウム・新プロ「日本語」「21世紀の日本語音声教育に向けて」予稿集、3-1~3-7.

(お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻)